ガルパン短編集め

紅福

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこかで時々書くガルパン短編をこちらにもしまっちゃおうね

時間軸順になってますが話は繋がってません

適当につまんで頂戴

目次

7―304 ―― 1
限りある青い春を相手のゴールにシュート。 ―― 7
逸見ｖｓ直下先輩 ―― 14
ガルパンすべらない話 ―― 20
人間 ―― 33
押田の渦 ―― 43
● ―― 53
陰摩羅鬼の暇 ―― 63

7—304

【エリカ】

7—304。

ななのさんまるよん。

別に暗号でもなんでもない。学生寮の7号棟、304号室を指す言葉。ここ、黒森峰女学園の学園艦に於いては『ななのさんまるよん』と言ったらそこを指す。

学校の怪談だ、七不思議だ、なんてものは遅くとも中学生には卒業しておきたいものだけど、案外そういう話は何歳になっても、どこにでもあるものなのかも知れない。

黒森峰のようなお固い学校にも、そんな噂は絶えず存在している。『7—304』もそんな噂のひとつ。

場所が学生寮なものだから、無縁の生徒なんてほとんど居ない。だからと言うか何と言うか、その噂は入学してすぐに聞こえて来た。

『学生寮7号棟の304号室が、やばいらしいよ』

何がどうやばいのかは分からない。

まあ、噂なんて所詮はそんなもの。話の種にさえなれば、説得力は二の次でいいのよ

ね。それからその噂は暫く一人歩きをして『昔、その部屋で自殺した生徒が居たらしいんだけど～』『殺人鬼が住んでたらしいんだけど～』といった申し訳程度の尾ひれを手に入れたようだけど、それはそれで余計に説得力を失ったような気がしないでもない。殺人鬼て。

ただ噂の真偽はさて置いてひとつだけ確かなのは、あの部屋は何年も何年も空室であるらしいということ。仮にこの学生寮が満員になったとしても『7―304』にだけは人を入れることは無い、らしい。一学年上に姉が居るルームメイトの子がそう言っていた。

成程ね、と思う。空室の理由は分からないけど、そうやって想像をかき立てる材料として使える事実があるなら、話題にもしやすい訳だわ。

と言う事は結局、空室という事実が材料になって発生した『お話』に過ぎないのね。そう思うと馬鹿馬鹿しくなってしまって、その時の私はそれ以上のことを考えるのを辞めた。

それから数日後の、学校の帰り道。

学生寮の間の道を歩いていると、ふと、例の部屋の窓が目に留まった。

何だろう。

上手く説明が出来ないけど何か引っ掛かるものを感じた、ような気がする。その感覚

の正体が分からず少しモヤッとしつつ、その窓を暫く見詰めていると、ふわりとカーテンが揺れた。あれっ、人が居るのかしら。

って言うかそもそも、空室ならカーテンがあるのもおかしいわよね。ああ、違和感の正体はそれか。

行って、みようかな。

何故そんなことを思ってしまったのか、私の足は引き寄せられるように7号棟に向かって、澱みなく動いた。

大きく7と書かれた棟の入口に着くと、まず集合ポストに目が行った。『7—304』と書かれたポストには粘着テープで蓋がされ、ネームプレートも外されている。成程、これは正真正銘の空室だわ。

棟自体には別に変わったところは無い。まあそれは当たり前か。噂の空室があるというだけで、それ以外は他と変わらない学生寮なんだし。

ところが階段を上り例の部屋の前で来ると、それまでとは明らかに違う異様な雰囲気を目の当たりにして私は言葉を失ってしまった。

3階の4番目、さっきカーテンが揺れるのを見たのは、間違いなくこの部屋だと自信を持って言える。

だけど、この中に人が居る事があり得ないというのも、ドアを見れば分かる。

その部屋のドアは、厳重に溶接されていた。
これは確かに『やばい』という表現が一番適切かも知れない。
どんな理由があるのか知らないけど、流石に溶接までしてあるのは普通じゃない。この部屋は、やばい。
そこでさっさと帰れば、それが一番良かったんだと思う。不思議だなあと首を傾げながらその場を離れれば、それが一番良かった。だけど、私は更に良くない事に気が付いた。ドアに、他の部屋と同じように覗き窓が付いている。
私は、覗かずにはいられなかった。
覗き窓から見る限り、部屋の造りは他の部屋と全く同じ。ただ空室と言うだけあって全体的にがらんとしていて、生活感の無さが如実に伝わってきた。部屋に関してはそんなところ。ある一点だけ、どう考えてもおかしい箇所があるのを除いては。
玄関から奥のリビングへと真っ直ぐに伸びる廊下。
その廊下の真ん中に、子供が立っていた。
男の子か女の子かも分からない、中性的な顔立ちの子供が廊下の真ん中に立って、こちらをじっと見詰めている。ぞわり、と鳥肌が立つのを感じた。目が、合っている。
子供は私と目を合わせたまま、ゆるゆるとこちらに向かって歩き始めた。私は覗き窓から目を離すことも出来ず、竦んだようにその場から動けなくなっている。心臓が、自

分でも分かるほど大きな音を起てて脈打っていた。
やがて子供と私の距離が、ドアさえ無ければ触れ合えるほどにまで近付いた頃。
脇から突然、腕を強く引っ張られた。
「なにやってんの」
この棟の住人らしかった。
その後。
体の力が抜けてしまった私はその人に手を引かれるまま隣室に招かれ、そこでコーヒーをごちそうになりながら少し話した。と言っても内容は互いの自己紹介とか、そんな程度。
その人は一学年上の先輩で、どこかぽやんとした雰囲気があって、なんだか先輩という言葉の印象とはちょっとずれているような、そんな人だった。
「気軽に『なおちゃん先輩』って呼んでね～」
「はあ」
なおちゃん先輩はある程度事情が分かっているというか、私みたいにあの部屋に捕まっている一年生を何度か助けているらしい。
先輩はあの部屋について多くは語らず、私を咎めるようにわざと怖い顔を作って一言。

「もっていかれるよ」

そう言った。

何をどうもっていかれるのか、そんなことはもう、どうでもいい。

あの部屋は、やばい。

限りある青い春を相手のゴールにシュート。

黒森峰女学園とアンツィオ高校。

定例の練習試合を終え、互いの健闘を讃え合ったのちに開催された食事会での出来事である。

「さあお前たち、湯を沸かせ！　釜を炊けぇー！」

アンツィオ高校戦車道チームの隊長、統帥ことアンチョビの高らかな声を合図にして、隊員たちは待ってましたとばかりに一斉に動き出した。

ある者はテーブルを運び、ある者はパスタを茹で、てきぱきと準備を進める。その中には当然のように、副隊長であるペパロニの姿もあった。そんな隊員たちの、ある意味では試合中よりも統率の取れた働きにより、お馴染みの巨大な食卓があっと言う間に完成した。

一方、アンツィオに比べ料理慣れしていない者の多い黒森峰の隊員たちは、律儀に整列して直立不動の姿勢でその様子を眺めている。しかし、食欲をそそる香りが辺りに漂い始めるにつれて、見るからにそわそわと落ち着きを失くしていった。如何に規律正しい黒森峰の隊員といえど、その実態は育ち盛りの高校生である。試合のあとはお腹が空

くのだ。
アンツィオの隊員たちも、そんな黒森峰の様子を見て満足げな笑みを浮かべている。試合にこそ敗けたが、それでもこうしてアンツィオ生として黒森峰を唸らせていることが嬉しくて仕方ないといった様子だ。
そうして形成された和やかなムードのなか、食事会は始められた。
と。そこまでは良かったのだが、それから幾らもしないうちに騒ぎは起こった。
「おい、貴様」
和気藹々とした食事の場に似つかわしくない、明らかに怒りの籠った声が辺りに響いた。
特別の大声というわけでもなかったのだが、その低く短い声は黒森峰の隊員たちを震え上がらせるには十分すぎた。
何せその声の主は、他でもない、黒森峰女学園戦車道チームの隊長。西住まほのものだったのだから。
彼女の一声によって黒森峰の隊員たち、つまりその場に居た者のほぼ半数が反射的に凍りついてしまったことで、残り半数となるアンツィオの隊員たちも何事かとざわつき始め、そうして辺りの空気は一瞬にして不穏なものとなった。
ああしまった目を離してしまったと悔やみながら駆け付けた逸見エリカが見たもの

は、案の定。腕組みをして仁王立ちでアンチョビを睨み付けている、我らが隊長殿の姿だった。

なんとまあ、高圧的な佇まいだろう。頼むからやめてほしい。

折角美味しそうなパスタを見付けたところだったのに。

「ぶつかっておいて挨拶も無しか」

「あぁ、!?」

ああ、始まってしまった。

破落戸（ごろつき）の言い掛かりのような物言いをするまほの言葉に、それまで機嫌よくにこにこしていたアンチョビも表情を一変させた。眉をハの字に下げ、目を見開いて唇を尖らせている。こちらも見事に破落戸の顔つきである。そんな顔ができたのかと思うほど、普段の彼女からは想像もつかない形相だ。

「どぉーも、こんにちわー！　西住流のお嬢さん！」

肩をいからせてずんずんと近付いてくるアンチョビと、微動だにしないままそれを睨み付けているまほ。エリカは咄嗟にその間に割って入ったが、さっぱり生きた心地がしなかった。

隊長同士の喧嘩を放っておくわけにも行かないが、まあ止めたところで大人しく止まるはずもないのは百も承知なのだ。

全くこの２人ときたら、顔を合わせるたびにこの通り。
とにかく馬が合わず、ひたすら仲が悪い。目を離すとすぐにこうやって喧嘩を始めてしまう。雑誌などで各校の隊長たちの集合写真を撮る際に、この２人がよく離されている理由がこれだ。
「姉さん、ストップ！　何やってんすかあ！」
「はーなーせ、ペパロニ！　先に突っかかってきたのはあっちだ！」
少し遅れてペパロニも飛んできて、すぐさま慣れた動作でアンチョビを押さえつけた。彼女もエリカと同様、この２人が喧嘩を始めた際の制止役をやっている。
いや、やらされていると言うべきかも知れないが。
ともあれ。遅れてすまん、というようにエリカへ目配せをしたペパロニに、エリカのほうも気にするなといった表情で応えた。食事会の場で彼女が忙しいのは仕方ない。むしろ、そんななか駆け付けてくれたことに感謝しなくては、とすらエリカは思っている。
同じ苦労をする身、もはやそんなアイコンタクトが通じるまでになってしまっている。
「私がいつ、お前にぶつかったって？　えぇ？」
「さっき私の後ろを通っただろう。その時に髪が当たった」

「髪ぃ!?　髪が当たったぐらいで大騒ぎか、このお嬢さんは!!」
「貴様の髪は長すぎる。貴様が動き回るせいでその髪が鞭のように動いて人に当たるんだ。さっさと切れ」
「やーだーね!!　お前は伸ばせ!!」
「断る。誰が髪など伸ばすか、鬱陶しい」
　エリカとペパロニが仲良くアイコンタクトを交わしている最中にも、隊長2人は言い合いを続けている。
　もう、こうなってしまっては気の済むまでやらせたほうが早く終わる。エリカもペパロニも、経験則としてそれを分かっていた。手が出るような喧嘩にさえならなければ、とりあえずいいのだ。
　遠巻きに心配の目を向けていた両校の隊員たちも、なんだいつものやつかと安心した様子でぽつぽつとテーブルに戻り、辺りは先ほどの和やかな空気を次第に取り戻していった。
「だいたい貴様らの料理はだな」
「なんだ、うちの料理にまで文句があんのか!?」
「いや、味はいい。しかし明らかなカロリーオーバーだ」
「あぁ!?」

「それなのに味がいいから食べずにいられん。どうしてくれる」
「おーおー、そりゃ何よりだなあ!!　次はもっとカロリー高いもん用意してブクブク太らせてやるから楽しみにしとけ!!」
「望むところだ。じゃあ次はいつにする?」
「えーとね」
　言い合いをしつつ、隊長2人はもう次の試合の算段を始めてしまっている。
　この2人、仲は悪いくせに次回の約束は絶対に忘れないのだ。だからこその『定例』である。
　お陰でアンツィオは強豪校との定期的な手合わせによってめきめきと腕を上げた。その一方で、黒森峰も試合後の食事会を密かに楽しみにしている者が多く、それが彼女たちにとって効果的な息抜きとなっている。
　自然、学校の垣根を越えた友人も増えた。それこそエリカとペパロニなどは言葉を使わず意志疎通が可能なほど親密になっている。
　そして。
「次こそはうちが勝つからな!!」
「それは聞き飽きた。早く勝ってみせろ」
　この2人にも、なんだかんだ言ってガス抜きのような効能があるのだろう。

くだらないことで突っかかったり、気を遣わず思いきり怒鳴ったり。これはこれで、お互いが相手にしか見せない顔をしているのだ。

見ようによっては仲が良い、ということなのかも知れない。

そのことに2人が気付いているのかどうかは、分からないが。

逸見ｖｓ直下先輩

【直下（仮名）】

逸見エリカが新隊長。

まあ、そりゃそうだという感想。

こうなる事は前々から分かっていた。隊長が居なくなれば副隊長が繰り上がるのは当然で、そしてその副隊長は逸見エリカ。だから西住まほが留学のためにドイツへ行き、それによって空いた隊長の席に収まるのも当然、逸見エリカ。疑問の余地はどこにも無い。

遡って考えれば逸見が副隊長に決まった時点で、彼女がいずれ隊長になる事は決まっていたようなもの。まあ『転校でもしない限り』という但し書きは付くけれど、それはそれ。

結果的に逸見は何事もなく、勿論転校することもなく、副隊長から隊長に繰り上がった。

本来ならば、これは喜ぶべきこと。おめでとうありがとうと声を掛け合って、逸見の隊長就任を祝うのが道理。

それなのに私は、素直にそうすることが出来ない。

理由は察しが付いている。

逸見が隊長になったことではなく、私は自分が隊長になれなかったことが面白くないんだ。

私だって、この黒森峰に入学してから三年間、それなりに志を持って戦車道をやってきたつもり。名門であるこの場所で、戦車道をやるということに対する覚悟も、まあ半端なものは持ってないと思う。プライドだって、それなりにある。

だから私は、自分が隊長になれないことを確定させる『逸見の隊長就任』を、素直に喜べない。

比べる気すら起きない程の実力差があった西住まほが隊長だった頃は、そんなことは考えもしなかった。

逸見となら実力差はほとんど無い、なんて思ってる訳じゃあない。逸見だって副隊長で、要するに次期隊長に相応しい実力を認められていて、その結果として今回の隊長就任がある。逸見は、とっくに私なんかよりずっと先を行っている。その事実は揺るぎない。

それが、悔しい。

要するに私は逸見のことを未だに、侮る対象という意味での『下級生』として見てい

るんだろう。こうやって感情を解体してみると、よく分かる。
三年生の自分が、二年生の逸見に劣っているという事実。私が気に入らないのは、結局そこなんだ。ものの道理も弁えずに沸いてくるこの感情は『気に入らない』と、そう呼ぶのがきっと正しい。
碌でもない考え方。
しかしまあ、こうしてみると私が逸見に勝っているのは学年ぐらいのものなんだなということが見えてくるのが辛い。ただ、そこから目を逸らしていても仕方ない。この感情としっかり向き合わないと、私に前進は無い。たぶんね。
うじうじ考えるのを辞めて、私は私のやれることを頑張ろう。
さて。
そうとなったら早速、大きな問題がひとつある。
逸見の就任を素直に祝えない三年生は、何も私一人という訳じゃない。私と同じようなことを考えてしまっている子は他にも何人か居て、残念ながらそういう子達が逸見に感情をぶつけてしまうことも少なくない。
更にその三年生の影響力というものは馬鹿に出来なくて、逸見に対する無駄な不信感は他の一年生や二年生にまで波及しつつある。
逸見自身もそのせいで神経を磨り減らしていて、目に見えて心労を溜め込んでいる。

さっき廊下ですれ違った時なんか、思いっきり睨まれた。逸見と一緒に居た赤星が苦笑いをして代わりに頭を下げたけど、靄々（もやもや）は残った。なんだかなあ。

私に限っては逸見に対して直接何かをした訳じゃないけど、そうは言ってもね。気持ちを見透かされたような感じがして、ため息が出た。まあ、今の逸見には三年生全員がそういう風に見えてしまってるのかも知れない。

逸見のことを素直に祝えない気持ちは、まあ分かる。

でも、逸見に当たるのは違う。

これは軌道修正をしないとまずい。下級生達にまで影響が出ているようじゃ、私達が卒業すればそれで終わりという話でもない。

このままでは、黒森峰はまた負ける。それどころかチームが瓦解してしまう可能性すら見えて来た。

このままでいい訳がない。

卒業までもういくらも無いけれど、だからこそ、上級生としてしっかりしなくちゃ。

ひとまず、三年生達を纏めあげる所から始めよう。

出来るかどうかは分からないけど、これはきっと、私がやらなきゃいけないことだ。

『何か考え込んでいるようだが大丈夫か』

「ああ、ごめんごめん」

パソコンのモニターの向こうでは、留学のためにドイツへ行った友人が心配そうにこちらの様子を窺っている。そう言えば通話中だったね。
彼女は黒森峰の状況が気掛かりらしく、時々こうやって連絡をくれる。
「こっちは何事もなくやってるよ」
『だといいが』
僅かに表情を曇らせる。
単に心配というよりは、いきなり椅子を空けた事に対する負い目もあるんだろうけどね。
「そっちはそっちの戦車道に専念しなよ、まーちゃん」
『んん。ありがとう、なおちゃん』
「逸見も大変そうだけど頑張ってるから、心配しなくていいよ」
そう言ってあげると西住まほ、まーちゃんは幾らか表情を和らげた。
まあ嘘は言ってない。
だって、逸見の隊長就任によって一部の三年生との仲違いが起きて、それがチーム全体に波及しつつあるなんて、話せないよね。自分を責める癖のあるまーちゃんは、そんなことは知らなくていい。
まーちゃんに心配させないため、これからの黒森峰のため、そして何より私自身のた

め、この状況を叩き直してやろう。
頑張るぞ。
覚悟しとけ、逸見隊長。

ガルパンすべらない話

【ペプシ】

アリサ「短くてもいい？」

逸見　「面白ければなんでもいいわよ」

アリサ「うちの隊長のくしゃみが『ペプシ』なのよ」

ペパ　「だっはっはっは!!」

【寄り道】

ペパ　「北海道で、みんなで大学選抜と戦ったことあったじゃないっすか」

ヒップ「ありましたわねぇ」

ペパ　「あのあと帰る段になって、ウチらは食材探しをしたくて陸路で帰ったんすよ」

逸見　「あーー、そうだったわね。サンダースとかが乗せてくれるって言ってるのを断ってまで、わざわざ」

アリサ「あったあった」

ペパ　「っす。んで、それ自体は嘘でもなんでもなくて実際に食材探しもやってたん

すけど、実はその他にもちょっとイベントがあって」
アリサ「へぇ？」
ペパ　「ドゥーチェがね、『ディズニーランド寄ろう』って言い出したんすよ」
逸見「ふっふふ」
ペパ　「まあまあ、言うて高３っすから。遊びたい気持ちは分かるんすよ。あの人めっちゃディズニーランド似合いますし。でも北海道から栃木に帰るっつってんのに『ディズニーランド寄ろう』って」
絹代　「千葉ですもんね」
アリサ「ああ、『寄る』って距離じゃないわね」
ペパ　「そうっすよね。私もパッチョも『はぁ？』って感じで」
逸見　「で、行ったの？」
ペパ　「行きましたねー」
アリサ「あはははは!!」

【作戦】
ヒップ「知波単さんと練習試合をした時のお話ですけれど」
絹代　「ほほう」

ヒップ「唐突に、ダージリン様に『ローズヒップ、次はどうしたらいいと思う？』って振られたんですのよ」
逸見「ふふふ、今のモノマネ？」
ヒップ「『ローズヒップ、次はどうしたらいいと思う？』」
アリサ「へっ、変に上手いのツボるからやめて」
ヒップ「『んローズヒップぅ』」
アリサ「悪意が混じってきた」
ペパ「ヤバいヤバい、進まないのに面白ぇ、はっはっは!!」
逸見「進めなさいよ！」
ヒップ「あっはい。……えー、それで、私は『突撃したらどうですか』って返したんですの」
絹代「ほお！」
ヒップ「それは別に考え無しという訳でもなくて、あの頃の知波単さんは意識的に突撃戦法から遠ざかってる時期でしたし、何より聖グロが突撃に走るとは相手も思わないだろうっていう考えも込みでの提案だったんですけれど。それを聞いたダージリン様が黙っちゃいまして」
ペパ「あー、怖い怖い……」

逸見「隊長が黙ると怖いわよね」
ヒップ「そうなんですのよ。で、それが丸々1分くらい続いて」
逸見「試合中の1分は長いわ」
ヒップ「ええ。だから私も不安になっちゃって、さっき言ったようなことを説明したんです。知波単さんの意表を突くためで、あーだこーだみたいな」
アリサ「うんうん」
ヒップ「で。あらかた説明が終わったら、ダージリン様、すっごいしみじみと『良い作戦ねぇー……』って言ったんです」
逸見「ふっふ」
ヒップ「それがまぁーー気分良かったですわ」
絹代「あっはっはっは」
ペパ「それが締めかよ!」
逸見「え、試合は?」
ヒップ「負けましたわね」
アリサ「あはははは!!」

【あだ名】

ヒップ「まーた私ですの!?」
逸見「サイコロだからね……」
ペパ「あるある」
ヒップ「えーーと……それじゃあ、あだ名のお話でも致しましょうか」
絹代「ほう」
ヒップ「まあ、『ローズヒップ』自体、ある意味あだ名なんですけれど、長いので縮めて呼ばれることも結構ありますのよ。『ローズ』だったり『ヒップ』だったり。先輩方に多いですかね」
ペパ「あー、そういうのあるよなあ」
ヒップ「はい。で、呼ぶ方は慣れてくるとそれすら縮め始めるんです。私は先輩方の愛情表現だと思ってお返事をしてますけれど、ふと我に返ると、なかなか面白い名前で呼ばれてるなとも思いますの」
アリサ「なんて呼ばれてるの？」
ヒップ「『ズ』って呼ばれてますわ」
逸見「あっははは」
絹代「ああ、『ローズ』が縮んで『ズ』ですか！」
ペパ「あっはっは！　ヤバい、めっちゃ呼びやすいじゃん……」

アリサ「ズ」
ヒップ「はいですわ！」
ペパ　「あはははは！」

【反省会】
アリサ「反省会……の話をしましょうか」
ペパ　「うわー来た」
絹代　「反省会ですか」
アリサ「そうよ、反省会。サンダースが負けた試合の後に時々やるやつ、知らない？」
絹代　「何か特別な内容なのですか？」
アリサ「そうねー。一般的な意味で言う、みんなで意見を出しあって次回に活かしましょうーみたいな反省会ではないわ」
逸見　「ああ……見てたかも。大洗に負けた時でしょ」
アリサ「その通り」
逸見　「ケイさんに『反省会やるから』って言われた時点で完全に滅入ってたわよね、あなた」
アリサ「そうそう。サンダースの反省会ってね、反省会って言うよりは『罰ゲーム』っ

て感じなのよ」
絹代　「そうなんですか!?」
ペパ　「うははは」
アリサ「三角くじの機械……って言って分かるかしら」
逸見　「ああ、あの丸い……ドーム型の?」
アリサ「うんまあ、ドーム型って言っていいかは分からないけど、丸いやつね」
絹代　「中で風が吹いてて、くじが舞ってる……」
ヒップ「ブワァァって」
ペパ　「ブワァァってな。デカいやつ」
アリサ「そうそう、そのブワァァよ。あれの中に水着で入れられるの」
絹代　「うわぁぁ」
アリサ「で、外から代わる代わる手を入れて、誰かが当たりを引くまで出られないって訳」
逸見　「地獄じゃない……」
アリサ「そう、地獄よ!　三角くじは全身にチクチク刺さるし、手を入れるやつらは面白がってつついて来るし。まあ勿論、そのお陰で反省はするんだけどね!」
絹代　「ああ、だから反省会と」

アリサ「そういうこと。で、反省の度合いによって中の三角くじの数が違ってね、軽い時は３０枚くらいかしら」
逸見「当たりは1枚？」
アリサ「そうね、要するに誰かが　１／３０　を引くまで続く」
ペパ「大洗の時は何枚だったんすか？」
アリサ「３００枚」
ヒップ「ぶっふ」
ペパ「うはははは！」

【カタカナ】
絹代「気のせい……ではないと思うのですが」
アリサ「なになに？」
絹代「今日も既に何度かありましたが、皆さん、私がカタカナの言葉を使うと『ん？』って顔をされますよね」
逸見「うっ、うん」
ペパ「それは、まあ」
ヒップ「何となく……はい」

絹代　「横文字も人並みに使うんですが、どうにも、そういうイメエジが抜けなくて」
逸見　「イメエジが」
ヒップ「良い具合のところを突いてくれますわね」
アリサ「ね」
絹代　「して、先程お手洗いに行った時の話ですが、そこでペパロニさんに会いまして」
ペパ　「あっ、うん」
絹代「ペパロニさん、ものすごく期待されたような表情で『この場所のこと、何て呼ぶんすか?』って言うんです。もうその時点で分かったんですよね、ああ、何か横文字でない言い回しを使って欲しいんだなと」
アリサ「うーわー」
逸見　「それは無いわペパロニー」
ペパ　「待って待って、違うんすよ!　だって聞きたくなるじゃないっすか!」
アリサ「分からなくもないけどさあ」
絹代　「こういうこと、実はよくあるんですよ」
ヒップ「そうなんですのね」
絹代　「ええ。でももう正直なところ、内心うんざりしていまして。ここはひとつ、ペ

パロニさんにもびしっと言ってやらなくてはと」
逸見　「おお！」
絹代　「『あのですねぇ』と！」
アリサ「言ってやりなさい！」
絹代　「『厠（かわや）です』と言いました……」
ヒップ「ふふふふ」
ペパ　「ほらあ、言ってくれたんすよ！」
逸見　「なんで!?」
絹代　「いやあ、期待に応えなくてはと思いまして、頭の中で色々な言い回しを探しましたよ。そうしたら、やっぱりペパロニさん『夢が叶った』みたいな顔をするものですから」
ペパ　「ドンピシャでしたね」
絹代　「『やっぱり厠って言うんすねぇ！』と満面の笑みで言われたらもう引っ込みが付きませんよね」
逸見　「待って、さっきから西のペパロニのモノマネがすごいツボなんだけど」
アリサ「あー。似てないんだけど、なんか分かるのよねー」
絹代　「『やっぱり厠って言うんすねぇ！』」

ペパ　「そんなしゃくれてないっすよ!?」
逸見　「あはははは!!」

【好きな食べ物の話】
逸見　「ハンバーグ」
ペパ　「ぶっふ」
アリサ「流石に単語で笑わせに来るのはずるいわよ」
逸見　「いや、私だって心外なのよ？　ハンバーグって言っただけで笑いが取れるまでになってるの」
絹代　「ええ、まあ、羨ましくはないですね……」
逸見　「でしょ。でね、うちの元隊長も似たような事態になったことがあるの覚えてる？」
ヒップ「ああ、カレー」
逸見　「そうそう。西住まほ選手の好物はカレーってね。あの人は選手としての知名度も高いから、余計によ。イメージが付いちゃったのよね」
絹代　「それは確かにありますね」
逸見　「うん。それでね、まほさんがまだ日本に居た頃の話なんだけど、学校の帰りに

『ちょっと買い物をする』って言ってコンビニに入ってったの」

アリサ「ふむ」

逸見「私もその後ろを付いてって眺めてたんだけど、隊員たちが使う消耗品と、備蓄の食料を買ってるみたいだったのね」

ペパ「ほうほう」

逸見「それね、見たらレトルトカレーとストローだったのよ」

アリサ「んっふふ」

ペパ「はっはっは！」

逸見「レジの店員さんも、買い物に来たのがカレー好きの西住まほ選手って分かってるから、明らかに『マジで？』って顔してて」

絹代「ふぅぅふふふ」

逸見「でも本人は全くそんなつもりは無いし、店員さんが妙な顔をしてる理由にも心当たりが無い。もちろん私も笑う訳には行かないし。でもそういう状況って、笑うでしょ？」

ヒップ「ふっふふ、笑いますわね絶対」

逸見「必死で堪えながら帰ったんだけどね。まほさんが悪気ゼロでトドメみたいに『足りるかなあ』ってボソッと言って、そこでもう駄目で『エヒィっ』て吹き出しちゃっ

て」

ペパ　「あっはっはっは！」

まほ　「いやあ、滑らんなあ」

逸見　「えっ」

人間

夏のある日、どん底にて。

カウンターでは、暑気から逃れようとやってきた冷泉麻子と、それを叱りつけながらも一緒に涼んでいる園みどり子、通称そど子が尻を並べ、二人揃ってクリームソーダを啜っている。

珍しいことに他に客は居らず、店内には二人がソーダを飲む小さな音と、カウンターの向こうでカトラスが暇そうにグラスを磨く音だけが響いている。

「ねぇ、変なこと訊いてもいい？」

最初に口を開いたのは、そど子だった。

静かな店内で、彼女のキンキンした小型犬のような声はよく通る。ソーダの上のアイスクリームを上手く掬えずに苦戦しながら、そど子は言葉を続けた。『訊いてもいい？』などと言いつつ、答えを待たずに喋り始める。そういう奴である。

「この店に関する、変な噂を聞いたんだけどね」

彼女は元風紀委員長で、つまり既に現役を引退した身ではあるが、それでも現在はその相談役という立場である。

自然、学園内の様々な噂が耳に入ってくるのだろう。その中には良い噂も悪い噂もあるだろうが、話しぶりからすると今回の話はどうやら悪い噂であるようだ。

折角甘いものを飲んで涼んでいる時に不粋なことだが、話そうと思ったら我慢がきかない性分なのだろう。

「変な噂なんていくらでもあるよ」

ことも無げに、カトラスが言葉を返す。

まあ、そうだろうなと麻子は思った。普段から海賊のような連中が出入りする店である。どんな陰口を叩かれていても不思議は無い。

カトラスとて、そんなものをいちいち把握はしていないだろう。

しかし、そど子が耳にした噂とやらは、そういった有象無象とは若干毛色の違うものであるらしかった。

まあ考えてみれば、そど子も百戦錬磨と言っていいほどの場数を踏んでいて、ついには風紀委員の勘などという訳の分からない感覚をものにしてしまっている。検証が必要な噂とそうでない噂の区別ぐらいは容易に付くのだろう。

面白そう。

口こそ挟まないが、麻子はそう思っていた。

「どんな噂？」

「あのね、この店でペットを飼ってるって話なんだけど」
やたらと勿体付けた割に、騒ぎ立てるほどの話ではない。変な噂というよりは、どちらかと言えば、ほのぼのニュースといった趣である。言ってしまえば、拍子抜けだ。
果たしてそど子は、この噂のどこに検証の必要を感じたのか。まさか『飲食店でペットなんて不衛生で云々』などと言うつもりだろうか。クリームソーダを飲みながら。
興味を失いかけた麻子は、カトラスがグラスを磨く手を止めたことに目敏く気が付いた。そど子の話に、何か聞く価値のようなものを感じたようだ。
「ペットって？」
「聞いた話では、人間」
ああ成程、と麻子は思い直す。
事情が変わった。ペットとして人間を飼っている、そういう話ならば大問題だ。
加えてそど子自身、この店で鎖に繋がれて掃除をさせられた経験がある。彼女がその噂を信じ検証しようと考えるのは、偏見ではないのだ。
「飼ってるよ」
「んなっ」
いともあっさりとそう答えたカトラスに、一瞬どう反応したものか分からなくなり、そど子は口をぱくぱくさせた。

しかし、元とはいえそこは風紀委員長。すぐに気を取り直し、カトラスに対して啖呵を切り始めた。クリームソーダを飲みながら。

「解放しなさいよ、直ちに！」

「そんなことしたら学園艦が沈んじゃうよ」

特徴的なキンキン声で怒鳴るそど子に狼狽える様子もなく、カトラスは平然として答えた。思った以上に物騒な答えが返ってきたことに、そど子は今度こそ言葉を無くして黙り込んでしまった。

何か言い返さなくてはならないのに、言葉が見付からない。そんな状態である。

しかし解放したら学園艦が沈んでしまう人間とは、一体どのような人物なのか。そしてそれを『飼っている』とは。ただごとではない話の筈だが、カトラスが妙に落ち着いているせいか、いまいち緊迫感が無い。

「話が見えないな」

「うーん」

聞いているのか、いないのか。麻子の問い掛けにカトラスは生返事をしながら背後の棚をごそごそやって、酒瓶を一本取り出した。学生が飲むためのノンアルコールではなく、正真正銘の酒のようだ。

正直、ペットを飼っていることよりこちらの方が問題のような気がしないでもない。

実際、そど子も何かを言いかけたが結局辞めたので、麻子もそれに倣って黙っておくことにした。突っ込みが追い付かないとは、まさにこういうことを言うのだろう。

「これが餌」

カトラスはこれから、そのペットに酒もとい餌をやりに行くのだという。つまりその人間は、成人しているということか。

いずれにせよ、説明するより見せた方が早い。そういうことらしい。

そしてカトラスは、カウンターの内側に二人を招き入れた。

見ると、彼女がいつも立っている辺りに更に下へ続く階段がある。『ペット』はそのすぐ下に居るらしい。

猛獣か何かと対面させられるのではないか。そう思ったそど子と麻子が緊張で身を固くした瞬間、店の入り口のドアが勢いよく開いた。

驚いてそちらを見ると、店に入ってきたのはムラカミだった。

「うーす。餌の補充、持ってきたぞー」

「ご苦労さま」

ムラカミは、カトラスが持っている瓶と同じデザインのケースを抱えていた。

酒を餌と認識しているということは、つまりムラカミも『ペット』の存在を知っているということ。

「ちょっと店番してて。『しらす』に餌をやってくる」
「そいつらも連れて行くのか」
「うん」
特に慌てる様子もなく、淡々と会話を交わしている。
どうも隠し事をしているという意識は無く、すっかり日常として受け入れているらしい。少なくとも、見られて困るものだとは考えていないようだ。
果たしてこの話はどんな範囲で情報が共有されているのだろう。
「船舶科のやつらはみんな知ってるぞ」
「ああ」
学園艦の浮き沈みに関わる存在であれば、それが道理。それは、妙に説得力のある事実だった。
しかし今度は、そんな話が今の今までそど子の耳に入らなかったことが不思議になってくる。箝口令が敷かれているという訳でもなさそうだ。
「普通のこと過ぎてわざわざ話さないんだよ、誰もね」
「まぁー、ペットに餌やってるだけだしなあ」
聞けば聞くほど分からなくなってくる。カトラスとムラカミの平然とした態度と、話の物騒さが全くと言っていいほど噛み合わない。

しかしまあ、下に降りれば全て分かるのだろう。そう思うことにして、麻子はそれ以上の憶測を辞めた。
「この下は物置の筈だけど」
「よく知ってるね」
「降りるのは初めてだけど、艦内の見取図は全部頭に入ってるもの」
解放すれば学園艦を沈めるような人間を、物置で飼っている。
これまでの話を総合するとそういうことになるのだが、どこをどう取っても物騒な話である。自分たちは一体、この下で何を見ることになるのだろう。そど子と麻子はまた、緊張で身を固くした。
ムラカミに見送られ、酒瓶を手にしたカトラスを先頭にして階段を下る。
すると、三人は幾らもしないうちに足を止めることになった。
崩落でもあったのか、階段が壊れ、半ばほどで不自然に途切れているのだ。
「気を付けてね」
「何よ、これ……」
そど子が唖然とするのも無理はない。
階段が途切れている部分から下を覗き込むと、そこには巨大な赤黒い穴が広がっていた。

どう見ても、これは物置などではない。底すら見えない、どこか内臓を思わせるような気持ちの悪い色をした、ただただ巨大な穴だ。

「成程な」

麻子は高所が苦手なので覗き込むのをすぐに辞めたが、これがどういうことなのか、すぐに理解した。

ここで飼っている『人間』が何者なのか。

そしてそれを解放すると何故、学園艦が沈むのか。

何故、酒を餌と呼ぶのか。

全てに合点が行った。

恐らくは、カトラスが持っている酒はここから直接、あの穴に向かって注ぐのだ。麻子はそう、予想した。

そしてその通り、カトラスは瓶の蓋を外し、穴に酒を注ぎ始めた。とくとくと音を起て、酒が穴に吸い込まれていく。そど子も麻子も、無言でその異様な光景を見守った。

そしてカトラスはしっかりと瓶を振り、律儀に最後の一雫まで残さず、穴に酒を飲ませた。

「はい、餌やりおしまい」

この穴は、巨大な生物の口だ。

途方もない大きさの生物が海底で学園艦にへばり付き、外から頭を突っ込んで口を開けているのだ。

恐らく、こうやって定期的に酒を注いで眠らせないと動き出してしまうのだろう。もしそんなことになれば、確かに学園艦が沈む事態も考えられる。

この生物の頭が蓋になっているから、浸水せずに済んでいるのだ。

もしかしたら『どん底』はこの穴に酒を注ぐために、わざわざその真上に作られた場所なのかも知れない。少なくとも船舶科には、それがこの店の役目という常識が存在するようだ。

そして『どん底』のメンバーはそれを日常として受け入れており、あの生物をペットと呼び、名前まで付けて餌をやっている。

さもなくば、ペットの餌やりとでも思い込まなければ神経が保たないか。

いずれにせよ学園艦の平穏のために、巨大生物の口に酒を注ぎ続けている。

それは、わざわざそど子の耳に入れるほどでもない、常識と化すほどの長期に渡り、恐らくはカトラスたちがこの学園に入学するよりも、ずっと以前から代々行われてきた行為なのだ。

この店では『ニンゲン』を飼っている。

真っ白な身体をした人型の巨大生物、ニンゲン。またはヒトガタ。

海底にそんな名前の未確認生物が棲んでいると聞いたことはある。だが、だからこそ、まさかこんな身近なところに実物が居るとは夢にも思わなかった。
ただの都市伝説だと思っていた。
まだ真相を理解していない様子で穴を覗き込んでいるそど子に説明するのは、店に戻ってからにしよう。ここで話して驚かせて、穴に転落でもされたら敵わない。
「戻ったら、クリームソーダおかわり」
「毎度」
それはそれとして、単純に怖いので一刻も早くこの場を離れたい。
麻子はそう思った。

押田の渦

【押田】

匂いで分かる人、という考え方の話。

嗅覚の鋭い者にはよくあることだが、そういう他人の覚え方をすることがある。体臭が独特だったり珍しい香水を使っていたりと事情は様々だが、特有の匂いを持っている人というのが一定数居るのだ。

これは別に悪臭という意味ではなく、あくまでも特徴的な匂い全般の話。まあ中には、犬のような匂いがする者も居ないではないが、それはそれ。

ともあれ、嗅覚の鋭い者はそういった人たちを匂いとともに記憶していて、嗅ぎ分けることができるのだ。かく言う私も、実はそんな鼻を持つ一人。

まあ嗅覚が鋭いという言い方をしてしまうとそれこそ犬か何かのようで嫌だが、単に過敏なだけだ。私は鼻が人一倍敏感なものだから、そのお陰で『匂いで分かる人』の数が多い。

私の密かな特技、ということになるのだろうか。

まあ使いどころは皆無に等しいのだが、かと言って抑えられるものでもない。

戦車道の訓練の後などは特に顕著で、自分と同じ戦車に乗っていた者のことは目を瞑っていても分かる。狭い戦車の中で乗員同士と戦車自体の匂いが混じり合い、戦車を降りる頃には全員が同じ匂いになっているからだ。

これは自分たちだけに限ったことではなく、私は他の戦車に乗った者たちも車輌ごとに大体嗅ぎ分けられる。

安藤くんなどは凄い凄いと囃し立ててくれるが、残念ながら嬉しくはない。嗅ぎ分けたところで、だからどうしたとしか言いようが無いだろう。私はそう思っている。

この鼻が役に立ったことがあったとすれば、大洗女子学園の秋山優花里が学園艦に侵入した際にいち早く気が付いた時ぐらいのものだろうか。知らない匂いが混じっていればすぐに分かる。

しかしあれは、手柄という程でもないのでわざと黙っていた。

何せ全国大会優勝校の隊長車の乗員がノコノコ侵入してきたのだ。あんなもの、嗅ぐより顔を見た方が早い。

まあそんな訳で、私の鼻のことは私自身が話題にしないこともあって一部の人間しか知らない。

さて。

話を戻すが、そんな私が思う『匂いで分かる人』の筆頭は、実はマリー様だ。

あの方はいつでもお菓子のような甘い匂いがする。いや、お菓子のようなと言うよりは、お菓子そのものと言ってもいい。

私が事務仕事に神経を集中させている時、ふわりと甘い匂いがしたので顔を上げるとマリー様が立っていた、というようなことも一度や二度ではない。

匂いで分かると言いつつ、失礼ながら、匂いだけではマリー様なのかお菓子なのか判別が付かないレベルだ。

何故なのかは分からない。これは本当に分からない。

あまりに自然なので今まで気にしたことが無かったが、冷静に考えると全く意味が分からない。

お菓子を作る側である祖父江たちならばまだ分かる。彼女たちは、食べる側とは比べ物にならないほどの長時間、お菓子と一緒に居るからだ。オーブンの前で焼き上がりを待っている間など、部屋に充満する甘い匂いが身体に付くこともあるだろう。

実際、彼女たちから甘い匂いがすれば『また何か作ったな』と分かる。彼女たちに関しては匂いの理由が分かるのだ。

マリー様は常に甘い。

全くもって、何が何やら。

安藤くんにこのことを話してみたところ、彼女は大して考えもせず『お菓子の食べ過

ぎなんだろう』と言って笑っていた。
そんな訳があるかと言ってやりたかったが、それは踏みとどまった。正直なところ、私もそれには気が付いていたが目を逸らしていたのだ。こういう場合、何も考えず行き当たるような理由が大抵の正解だ。
いや、しかし。
お菓子の食べ過ぎで身体から甘い匂いが出るようになるものだろうか。分からない。お菓子の食べ過ぎと言ったら太るのが普通ではないだろうか。砂部などは実際、いや、まあ、うん。
ともあれマリー様も食べ過ぎなのには違いない。とは言え、太らない理由に関しては相応に燃やしているからだと分かる。それはあの身体能力を見れば明らかだ。だからそれはいい。
うーむ。
もし本当に、お菓子の食べ過ぎによって身体がお菓子の匂いを発するようになったのだとしたら。まあ、日々の食べものや飲みものが人の身体を形成するのだと思えば納得出来ない、こともない。一応。
しかし、それでは。
お菓子を食べたマリー様の身体がお菓子によって形成され、それで甘い匂いを発して

いるのだとしたら。
それは、マリー様自身がお菓子になりつつある、ということにならないか？
いや。
いやいやいや。
何を馬鹿なことを。
流石にそんな訳がないだろう、疲れてるのだろうか。
「ん」
ふわりと甘い匂いがした。
ああ、これは、知ってる匂いだ。
振り返ると、矢張りというか何と言うか。マリー様が立っていた。
外にでも出ていたのか厚手のコートにマフラーに手袋と、がっちりとした防寒をしている。今日はそんなに寒かっただろうか。
「どぉしたのよ、そんなに難しい顔をして」
「ああ、マリー様の匂いのことで少し考え事を」
「匂い……？」
「ぐぁ。いっ、いえ……なんでも」
まずい。

これは非常にまずい、思い切り正直に答えてしまった。
露骨に表情を曇らせるマリー様を見て、慌てて話を逸らそうとしたがもう遅い。
私が人に自分の鼻のことを話さないのは、こういうこと。匂いが良いとか悪いとかの問題ではない。女性に向かって『匂う』と言うのは、とにかく語弊を生むのだ。
「ねぇ、匂いってどういうこと？」
「えーーとですね、それは、そのー……」
しどろもどろになりながら、何か上手く切り抜ける方法は無いかと思案する。
そこでふと、いや待てよと思い直した。
別に悪臭という話ではないのだし、ここは誤魔化すよりも、いっそのこと全て洗いざらい話してしまった方がむしろ良いのではないか。そうすれば妙な誤解も無いし、あわよくば私の疑問も解消されるかも知れない。
まあ、少し、勇気は要るが。
「話して頂戴」
「うぅ……」
やむを得ん。
「実はですね、これこれこういう訳で……」
「……私の身体からお菓子の匂いがする、と」

「です」
「それは今も？」
「ええ、まあ……」
「ふぅん……それで私が話し掛ける前に振り向いたのねぇ」
マリー様はコートの袖を鼻に当てて、すんすんと嗅いで小首を傾げた。自覚が無いらしい。
ああ。まあ、よくあることだ。
匂いを発している当人はずっとその中で生活しているものだから、自然と何も感じなくなってしまう。麻痺するのだ。
では矢張り、マリー様は日常的にこの甘い匂いの中に居るということだ。
「で？　私がお菓子になっちゃうかも知れないって？」
「それは、その……はい」
「ふっふふ」
そんな馬鹿な話がある訳が無いと分かってはいるが、そういったことを考えてしまっていたのは間違いない。ぐるぐると考えているうちに、否定材料を見失ってしまったのだ。
だからそこは出来れば否定して欲しかったのだが、マリー様は含み笑いを漏らすだけ

だった。
まあ、こういう人だ。
「食べてみる？」
言って、マリー様は人差し指をぴんと立てた。
唐突のことで一瞬理解が遅れたが、その言葉と、ジェスチャーの意味。
私の解釈が間違っていなければ、その指の味を私の口で確かめ、それでマリー様がお菓子か否か判断しろと言っているのだと思う。
確かにそれは、何よりの否定材料になってくれることだろう。
しかし、それは。
いいのか？
恐る恐る口を半分まで開いたものの、そのあとの一歩を踏み出す勇気が今ひとつ足りない。
そのまま呆けたように固まってしまった私を見ながら、マリー様は暫く指を左右に動かしたりくるくると回したりして間を持たせていたが、やがて。
「ん、む」
私の半開きの口に、指が差し込まれた。
咄嗟に唇を閉じ、咥え込むことになったマリー様の指。

えっ、甘い。
マリー様の指は、何故か生クリームのような味がした。
ああ、参った。
完全に油断していた。
起こる訳が無いと頭から信じ込んでいたことがそのまま起こってしまったせいで、私はただただ混乱してしまうほか無かった。
「んふふ」
当惑する私を見て、マリー様はまた含み笑いを漏らすだけ。
マリー様の甘い匂いに包まれながら味わったその指は、まるで本当にお菓子を食べているかのように錯覚した。
上手く誤魔化されてしまった、と言うことになるのだろうか。
結局その日、私の疑問は深まるばかりで解消など夢のまた夢だった。
話は少し変わるが。
後日、私は学園のとある場所で丸ごと冷蔵室に改造されたルノーと、その中に貯蔵された大量のケーキを見付けることになる。
勿論すぐさま犯人の目星は付いたがそれは黙っておくことにして、代わりにケーキをひとつ、つまみ食いさせて貰った。

矢張りと言うか何と言うか。
そのケーキは、マリー様の指のような味がした。

●

押田くんが体調を崩した。

いまいち釈然としないが、そういうことになった。

なんだか回りくどい言い回しになってしまったが、これには理由がある。彼女は実際に体調を崩した訳ではなく、いわゆる仮病というやつなのだ。いや、便宜上仮病という言葉を使ったが、あれをそう呼ぶのも妙な感じだ。

彼女が体調を崩したという話を聞いて気の毒になり、今しがた部屋まで行って当人と顔を合わせたが全くの普段通りで、具合の悪い素振りすらしていなかった。

けろっとした顔をして『悪いが休むぞ』などと言われてしまったものだから、雰囲気に引っ張られて『おおそうか』と返してしまったが、仮病というものはもっとこう、多少なりとも病気の演技をするものではないだろうか。

だからあれを仮病と呼んでは仮病に失礼だ。そう思う。

あれは結局、休む口実というか方便なだけで、病気である必要は無いのだろう。体調を崩すことではなく、休むことが彼女の目的なのだ。

まあ、それはいい。

良くはないが、とりあえずいい。

それよりも、押田くんが体調を崩した（ことになった）お陰で私が現在、ちょっとした苦境に立たされている。問題と言うならこちらの方が問題だ。

日頃は押田くんと分担していた事務仕事が、彼女が休んだことにより丸ごと降りかかって来たのだ。単純に考えて倍だ。あまり言いたくはないが忙しすぎる。いい加減、日も暮れてきたがさっぱり終わる気がしない。

押田くんが戻ってきた時のために、彼女の分の仕事は残しておいてくれようか、というようなことも少しは考えたのだが、まあそういう訳にも行かない。

その日の仕事はその日の内に片付けなければ、私がさぼったことになってしまう。押田くんの仕事だったものは、私に降りかかって来た時点で私の仕事なのだ。しかしまあ、そうは言ってもしんどいものはしんどい。文句も言いたくなる。

そして、そのしんどさに拍車をかけているのが、どういう訳か私と一緒になって残っているマリー様だ。

「ねぇ安藤、まだ終わらないの？」

「まだまだです。いつになったら終わるやら、見当も付きませんよ」

ひとりで黙々とやっていれば今頃は帰り道なんですがね、という言葉は飲み込んだ。事実ではあるが、言えばまた面倒くさいことになるに決まっている。

マリー様はああやって何をするでもなく、もちろん私の仕事を手伝う訳もなく、ただ呆けたようにして部屋の中をうろついて戸棚を弄繰ってみたり、ソファに寝そべってみたりしている。そうして時々、机仕事に励んでいる私に寄ってきてはちょっかいを出すのだ。

まあ、はっきり言って邪魔だ。

気が散って仕方ない。

「退屈だわ～」

ならば帰ればいいのにとは流石に言えず、うーんという生返事をするに留まった。何か意味のある言葉を返せば、今度はそこからお喋りが始まってしまう。

それに、マリー様が帰らないのには理由があるのだと思えば、滅多なことは言えない。お付きの砂部や祖父江を先に帰してわざわざ一人で残っているということは、そこに何かしらの目的がある筈なのだ。

それが何なのかは、分からないが。

「ねぇ安藤、これは何かしら」

「ん？」

また机に寄ってきたマリー様がひょいと手に取ったそれは、何の変哲も無い私の筆箱。銀色でブリキ製の、いわゆる缶ペンケースと呼ばれるタイプのものだ。

本当は、似たデザインで特殊なカーボンによる加工が施された『エレファントが踏んでも壊れない筆箱』というのが欲しかったのだが、如何せんあれは高価すぎたので安物で我慢している。

しかしまあ、考えてみればエレファントに踏まれる予定は今のところ無いので全く不自由はしていないし、この機能美とも言うべきシンプルなデザインには愛着が湧いてきたところだ。

「まっ、珍しい。こんなペンケース、初めて見たわ」

反射的に、ああそうですかいと返しそうになったが、また寸でのところで飲み込んだ。マリー様に悪気は無いのだろうから、邪険にしても仕方ない。

しかしなんとも返答に困る。この銀色で平べったいだけの簡素な筆箱は、マリー様にとって『珍しい』ものであるらしい。

裕福な暮らしをしているが故だろう、安物に馴染みが無いという事実が筆箱ひとつで浮き彫りになってしまうのは、どうにも遣り切れない。

「これ、開けてみてもいいかしら?」

「別に何も変わったものは入っていませんよ。ああ、蓋が少し固いので気を付け……」

「んんーっ」

「あっ」

私が言い終わるよりも先、蓋を開けようと無闇に力んだマリー様が勢い余って筆箱の中身をぶちまけ、その拍子に筆箱そのものも取り落とした。
辺りにペンやら消ゴムやらが散乱し、とどめとばかりに床に落ちる筆箱の金属音が、放課後の静まり返った室内に矢鱈（やたら）と耳障りに響き渡った。
マリー様は思った以上に大きな音が出たことに驚いたのか、筆箱を落とした姿勢のまま固まっている。
ううむ、限界だ。
「マリー様！」
「ひっ」
「おやつにします」
本当はもう少し仕事を進めて一段落させてからにするつもりだったが、どうにも苛々（いらいら）してしまっていけない。だからと言ってマリー様に当たり散らす訳にも行かない。今、若干危なかったが。
ともあれ休憩だ。一服するとしよう。
「お茶請けには甘いものを出しますが、コーヒーの砂糖は如何しましょうか」
「えっ、ええ。沢山入れて頂戴」
私が急に大きな声を出したせいで先程とは別の、腰が引けたような姿勢で固まったマ

リー様を尻目に散らばったペンと筆箱を片付け、戸棚から出したコーヒーを淹れて卓に並べ、鞄から『おやつ』を出した。

「安藤、それは何？」

「ふふふ」

露骨に訝しそうな顔をするマリー様に、思わず笑いが漏れた。

やはりと言うか、なんと言うかだ。ただの和菓子なのだが、これも安物の筆箱と同様マリー様には馴染みの無いものらしい。

エスカレーター組の生徒たちにはあまり知られていないが、この学園艦にも和菓子屋というものが存在する。洋食に飽き飽きした者のため、なのかどうかは分からないが一定の需要があるらしく、よく受験組の生徒たちで賑わっている。

客層に配慮してか、あまり高価なものを置かないのも人気の理由らしい。そこで買ってきたものだ。一個百円。マリー様が普段食べているケーキの一口分にも満たない値段だ。

笹の葉を模した細長いラベルで包まれた、一口サイズの真っ黒な玉。

確かに、何も知らずにこれだけを見れば『なんだこれは』と思ってしまう見た目をしている。マリー様の警戒も無理はないかも知れないが、しかし何のことはない。

これは、あんこ玉だ。

以前、押田くんに食べさせたことがあり、その時は然して気に入った様子は無かったのだが、昨日、また食べたいと言い出したので買ってきたのだ。

しかし、まさか今日になって当の本人が休んでしまうとは思いも寄らなかった。しかもわざわざ仮病のようなものを使ってまで、だ。

押田くんは一体何がしたいのか爽然（さっぱり）分からないが、段々と腹が立ってきたので考えるのを辞めた。不毛だ。それに関しては後日問い詰めるとしよう。

ともあれ、そんな事情で買ってきたものなので丁度ふたつある。

「これ、甘いの？」

「甘いですよー」

表面はゼラチンで薄く覆ってあるが、それ以外は丸っきりの純粋な餡子だ。私はこれ以上の『甘いもの』を知らない。

私個人はそこまで甘いものが好きという訳でもないが、苛々には糖分が良いと言うし、コーヒーのお供には丁度いい。

和菓子にコーヒー、これが意外に合うのだ。

そうして私があんこ玉を口に放り込んだのを見届けてから、マリー様は恐る恐るといった様子で同じようにあんこ玉を口に運び、間もなく小さな歓声を上げた。

「美味しい！　これ、何ていうお菓子なの？」

おっと、そう来たか。
好評なのは喜ばしいことだが、それは想定していなかった。しかし考えてみれば、食べたお菓子の名前が知りたくなるのは当然か。
実は、このお菓子には店が付けた特有の名前がある。
このお菓子の名前は何ですかという質問であれば、そちらの名前で答える方が良いような気がするのだが、私個人はその名前を気に入っていない。お菓子にいちいち洒落た名前を付ける店ではあるが、これに関しては、ちょっとどうだろうと思っているのだ。
まあ『これはあんこ玉です』と答えるよりはましだと思うが。
いや、どちらにせよすんなり答えれば良かったのだ。くだらない躊躇をしたせいで妙な間が生まれてしまった。
「……安藤？」
あんまり。
うーん、あんまりなあ。
まあ、黙り込んでいても仕方ないか。
「このお菓子は『餡鞠（あんまり）』と言います」
「まっ、素敵！」
ううむ、これまた想定外。

何が『素敵』なのかはよく分からないが、まあ、とりあえずマリー様のご機嫌を損ねるようなことが無かったのなら良しとするか。

そんなことを思いながら、コーヒーを啜った。

「ん、甘っ」

「安藤、それ私のカップ～」

「ああすみません、うっかりしていました」

どうやら取り違えてしまったらしい。卓に並べた時だろうか。

しかし、自分で淹れておいて何だが驚いた。マリー様が飲むものとは、これほどまでに甘いのか。

「口を付けてしまいました。淹れ直しますね」

「気にしなくていいわよ、そんなこと」

「そうですか……」

カップを交換し、改めて雑談を交わす。

「外はもう真っ暗ですね」

「貴女に送って貰うから大丈夫よ」

「まだ暫く終わりませんが」

「んふふ、いつまでも待ってるわ」

もしや。

マリー様はそれが目的でこんな時間まで残っているのだろうか、というようなことが頭をよぎったが、まさかなと思い直した。もしそうなら、砂部や祖父江だけでなく押田くんの仮病まで、この人の策略ということになってしまう。

「んふふ」

まさかな。

さて、休憩が終わったら仕事の続

ん、何

眠

「んふふ」

陰摩羅鬼の暇

【紗希】

自宅の居間にて。

阪口は私が出した茶に手を付けず、前置きなく言った。

「こども、出来ちゃった」

心臓が大きく、どくん、と跳ねた。

目を見開き阪口を見遣る。阪口は湯呑みを両手で包み込むようにして俯いている。表情は前髪で隠れ、読めなかった。

こども、出来ちゃった。

阪口の言葉を反芻する。

まさかそんな事が、と思ったが我々も良い齢だ。顔立ちこそ幼さを残し、見ようによっては子供のようでもあるが、齢はもう疾うに二十を過ぎて半ばに差し掛かる。早ければ成人前に子を産む者もあるのだ。不思議でもなければ、意外でもない。

澤も。

大野も。

宇津木も。
山郷も。
私も。
それぞれの道を歩んでいる。それこそ、結婚して子を産んだ者も居る。阪口が妊娠をした程度、驚くような話ではない筈である。否、『阪口が』ではない。『成人した女が』妊娠をした、ただそれだけの事なのだ。
しかし、心が酷くざわつく。その理由にも、私は心当たりがある。
肚（はら）の底ではどこか『ああ、やっぱり』と思っているのだ。事実が私の想像の通りであれば、それは目出度さの欠片も無い、あまりにも不憫な妊娠だ。
「紗希ちゃん、どうしよう」
顔を上げ泣きそうな声を出す阪口に、掛ける言葉が見つからない。阪口には悪いが、この時ばかりは己の日頃からの口数の少なさに感謝した。我ながら、つくづく相談相手に不向きなことだ。
皮肉にも、そんな私を阪口が一番の相談相手として選ぶ羽目になった事は、甚だ気の毒としか言いようが無い。
何も他の四人と疎遠になっているという訳ではない。ひとたび顔を合わせれば、我々は相変わらず仲の良い六人衆として機能する。私と阪口は、その中でも特別に近しい間

柄なのだ。
口数の少ない私と居て何が楽しいものか、阪口はしょっちゅう私と会いたがる。互いの家にも行き来する仲だ。
まあ、ここで私が黙っていても仕方ない。
意を決し『相手は』と問うた。
すると今度は阪口が黙ってしまった。湯呑みを包み込んだ手がかたかたと震えているのが見て取れる。言いたくない、か。まあ、それならそれで良い。
阪口が黙ってしまった事、それこそが私の憶測を裏付ける証左のような気がした。
「どうしよう」
そればかりを繰り返す。
しかしこう言っては悪いが、阪口が話した事と言えば、私に妊娠を打ち明けただけである。そこから一つも話が進まぬ中でどうしようもこうしようも無いものだが、混乱している阪口にそれを言っても始まるまい。
結局その日、私よりも口数の少ない阪口からどうにかこうにか引き出した話と言えば『相手は言いたくない』『親にはまだ言ってない』、そして『産みたい』。
言葉にすることで己の胸の裡を確認し、心持ちが幾分か落ち着いたのだろう。阪口の表情は沈痛には変わりないものの、話し始める前よりは多少和らいで見えた。

産みたい。

それは、それだけは、良かった。

腹の子だって産まれたいだろう。

そう言うと、阪口は堰を切ったようにはらはらと泣き始めた。

話している間に阪口の手の中の湯呑みはすっかり冷めてしまった。その茶を捨てて新しく熱いのを淹れてやると、阪口はまた、その湯呑みを手で包んだ。

「ごめんね、紗希ちゃん」

それから時は流れ、結局、父親が何者なのか誰にも喋らぬまま阪口は子を産んだ。

無論、親との悶着もあった。あまりにも阪口が喋らないものだから、一時は彼女の兄二人が疑われたそうだ。しかし阪口は、それは違うときっぱり否定をしたらしい。では誰なんだと問い詰めれば、黙り込む。

阪口がそうやって黙りを貫いた以上、親の方が折れるしか無かったようだ。

久方振りに会う阪口は、母親になっていた。

前に会ったのは、阪口が妊娠した事を私に打ち明けた日だ。だから私は、腹の大きな阪口を見ていない。精神的にも肉体的にも助けが欲しかったろうに、そんな時に傍に居てやれなかった事が悔やまれる。

しかし阪口が腹を大きくしている頃、こちらでも悶着が起きていたのだ。

久方振りに阪口に会う私は、人殺しになっていた。
まあ、そうは言っても直接手を下した訳ではない。死因は自殺だった。
しかし、私が殺したも同然なのだ。
私の言葉のせいで、人が一人死んだ。
まさか、あんな言葉が口をついて出ようとは。

「死ね」

そう言った。
まあ、言ったが、まさか本当に死んでしまうとは夢にも思わなかった。言い訳がましい事だが、殺すつもりなど毛頭無かったのだ
。
相手の死を本気で願っているならば、それこそ直接手を下す。本気で死を願うという感覚は分からないが、本気ならば直接やるのが道理というものだろう。
要するに、本気でも何でもなかったという話だ。
そして、それ以上に、死ねと言われて死ぬ馬鹿者が居るとも思わなかった。
しかし残念ながら、居た。

死ねと言われて死ぬ馬鹿者が、とてもとても身近に居た。

父。

片親であることを何より気に掛け、身の回りの物事全てに介入し、私の気持ちを不思議なほどに汲み、理解した父。

私が学園艦に乗ることを決めた時も反対せず、毎月過剰なほどの仕送りを寄越した父。

過保護などという簡単な言葉では表しきれぬほど、甲斐甲斐しく私を育てた父。

私は、その父に、死ねと言った。

その日の翌朝のことだ。

普段通りに自室で目覚め、階下に降りて居間の戸を開けると、父が天井からぶら下がっていた。あまりにも呆気ない。私に死ねと言われ、本当に首を括ったのだ。

遺書は探すまでもなく、すぐに見付かった。首を括るその瞬間まで握り締めていたのだろう、皺になった茶封筒が父の下に落ちていたのだ。それを拾い上げ中身を改めると、案の定というか何というか、私と阪口に宛てた謝罪ばかりが長々と綴られていた。

こんなものを遺されたところで、我々は如何すれば良いのだ。

ふつふつと沸き上がるこの感情は、紛れもない怒りだった。

抑えようのない怒りなど、産まれて初めての事かも知れない。私は手の中の遺書を滅

茶苦茶に破り捨て、父の骸にまた、死ねと叫んだ。
私が殺したのだ。
そうして、私は人殺しとなった。
直接の殺人でこそないが、私が父を死なせたことには変わり無い。だから私は警察にも出頭した。
私が死ねなどと言ったからあの人は死んだんだ、だから逮捕してくれと、何度も訴えた。しかし対応は素っ気ないもので、いずれも気の毒そうな目を向けられるか、さもなくば神経の病院を紹介されるか、そんな程度だった。
ならばいっその事、私も死んでやろうかとも考えた。
しかし、果たして死は償いになるのだろうか。私には、死ぬことは即ち逃げることのようにしか思えなかった。まさしく父の死に様が、そうだったから。
私は死にたい訳でも逃げたい訳でもない。償いたいのだ。
誰かが死ねと言ってくれたらどんなにか楽だろう、などと益体の無いことも考えた。しかし、そんな言葉を掛けてくれる人は居ない。私はもう、天涯孤独なのだ。
死んで楽になるよりも、生きて苦しめ。そういうことなのだろう、きっと。
「紗希ちゃん」
子を抱いた阪口が不安げに呼び掛ける声で我に返った。少し、物思いに耽りすぎた

か。

気が付くと、手の中の湯呑みがすっかり冷めている。新しく熱いのを淹れようと席を立った時、阪口の腕の中で子が、あいあい、と彼女にそっくりな声を出したのが聞こえた。

不覚にも笑みが漏れる。本当に、呆れるほどそっくりだ。

阪口は子に『紗利奈』と名付けた。

何とも皮肉な名前だが、まあ、道理だ。

その子は阪口の娘。そして私の、腹違いの妹。

つまりはそういう事だろう。阪口に訊くと、彼女は何も言わず、ただ頷いた。産まれながらにして片親とは気の毒な子だ。

そこでふと、思い至る。その子を育てる事、それこそが私の償いになるのではないか。

「一緒に育てよう、お母さん」

そう言ってやると、阪口は泣き笑いのような顔をして、また頷いた。